

幼稚園児の保護者に対する子どもの姿勢についてのアンケート調査

Questionnaire study on their children's body posture to parents of kindergarten children

スポーツ科学センター

天野 勝弘

AMANO, Katsuhiko

International Pacific University, Institute of
Sports Sciences

帝京科学大学

小林咲里亜

KOBAYASHI, Saria

Teikyo University of Science

体育学部体育学科

浅野 幹也

ASANO, Mikiya

Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

國學院大學人間開発学部

渡邊 奈々

WATANABE, Nana

Kokugakuin University, Faculty of Human
Development

アルファ医療福祉専門学校

水原佐和子

MIZUHARA, Sawako

Alpha medical welfare college

体育学部体育学科

三浦 孝仁

MIURA, Koji

Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

キーワード：姿勢教育, 保護者の意識, アンケート調査, 幼稚園

Abstract : In this study, we conducted a questionnaire on body posture to parents of kindergarten children in order to collect data for the introduction of posture education. The total number of questionnaire items was 97 questions.

The questionnaire was answered by 147 parents of younger, middle-aged, and older children attending F kindergarten in Tochigi prefecture.

As a result, the following became clear.

1. Kindergarten parents are more interested in posture
2. It is considered appropriate to start posture education from kindergarten
3. Posture education should be done both at home and in kindergarten
4. Parents are worried about the posture of their child's spine and feet
5. At the same time, parents are also concerned about their children's poor posture during meals
6. It is desirable to strengthen the system for checking the posture of children

From this study, the necessity and possibility of introducing body posture education in kindergartens was suggested. In addition, it is important to develop a program that allows children to have an awareness of their own posture and to create a good posture.

I. 緒言

一般論で言って姿勢は重要である。ほとんどの人はそう思っているに違いない。しかし姿勢を良くしようとしている、あるいは実際に行っている人はどのくら

いいるだろうか。中央教育審議会答申「子どもの体力向上のための総合的な方策について」²¹⁾においても姿勢の重要性は指摘されている。また、厚東と栗田¹²⁾は、「人間の身体の発揮し得る能力の総称」を体力と捉えた場合、人間らしい立位姿勢や歩行動作の獲得が

重要になってくるが、未だ、幼児を対象に立位姿勢や歩行動作に影響を及ぼす要因を検討した研究はほとんどない、今後、さらに検討が必要であると述べている。姿勢への感心についての報告もある。原田⁸⁾は、若い女性の姿勢に対する意識について調査し、姿勢に感心が非常にある、ややあるを合わせた割合は73%にのぼると報告している。また、自分の姿勢が悪いと思っている人は69%であり、その上で姿勢を直したいと望んでいる人の割合は83%であるとしている。これらのことから姿勢は直せるのなら直したいということである。実際、現代人の姿勢は悪い(阿部ら¹⁾、塩田ら¹⁸⁾)との報告もある。また姿勢研究への関心も高いと思われる。PubMedにおいて (posture) & (children) で検索すると、過去10年で5,235件の報告がヒットする(2021. 1. 7現在)。

にもかかわらず、「小学校学習指導要領」には昭和33年の改定以来、姿勢教育に関する言及はなされていない。また、家庭教育に関する国際比較調査報告書¹³⁾においても、子どものしつけと子どもへの期待について大規模な調査がなされているが、姿勢および姿勢教育についての調査は行われていない。別所²⁾によれば、低下する子どもの体力向上には、運動機会を増加させることに加えて、「姿勢教育」の見直しが必要であると述べている。Woollacort, M. and Shumway-Cook, A.²²⁾においても、近年の子どもの姿勢教育の乏しさが指摘されている。

スポーツにおいては姿勢は構えと捉えることができる。そこで構えの良し悪しがパフォーマンスに影響するという報告も多い^{3) 4) 5) 10) 11) 20)}。

そこでまず姿勢に関する意識を持つことは重要であろう。橋本ら⁶⁾は小学校養護教諭の姿勢への関心と姿勢教育実施現状について調査したところ、意識を持っている教諭の方が児童に対して姿勢教育を行っている者が有意に多かったと報告しており、教育側の認識が重要であると報告している。また、塩野谷¹⁹⁾は、親の自己効力感が高いこと、親自身の身体活動好意度が高いこと、や子どもの身体活動や生活習慣が重要だと認識しており、子どもの身体活動の推進に影響すると述べており、姿勢についての言及ではないが親の子どもへの意識の高さが重要であると述べている。同様の見解を永田¹⁷⁾や平野⁹⁾も指摘している。

しかしながら幼児期運動指針(2012)では、大人の意識が、子どもが体を動かす遊びをはじめとする身体活動の軽視につながっていると指摘している。このように、親や教育者が関心を持ち姿勢教育に取り組むこ

とが重要である。というのも、本人が自分の姿勢を意識して直すことは難しいからである。塩田ら¹⁸⁾は、女子大学生に自らの感覚でよい姿勢をとらせようとしたが、良好な結果は得られなかったと報告している。森尻ら¹⁵⁾も、よい姿勢を意識させても58%の者は適正にはならなかったと報告している。これらの研究は一過的な姿勢矯正を求めたものであるが、長期的、恒久的な姿勢矯正にはかなりの工夫が必要であるといえる。それでも、宮口と出村¹⁴⁾が、幼児に上履きとして草履を履かせる介入を行ったところ、姿勢および立位時の重心動揺の改善が見られたと報告していることから、姿勢教育の可能性の期待がうかがえる。

以上のことから、まずは親や教育者が姿勢に対する意識を持つことが重要だと言える。それにより姿勢教育への取り組みが進むと考えられる。しかも姿勢教育はできるだけ早い年齢からが望ましいであろう。

そこで本研究では、幼稚園児の保護者に対して姿勢に関する意識を調査することを目的とした。同時に、運動や生活についての調査も実施した。これまでの研究では、これらを総合して幼稚園児の保護者について調査した研究はみられないからである。しかし、本研究では、今後の姿勢教育のありかた、具体的な方法論を築くための基礎データを提示することを目的とし、これらの因果関係についての言及は、論文のボリュームも考慮し、ここでは行わないことにする。

II. 方法

1. アンケート項目と依頼方法

文部科学省が平成19年度から21年度に実施した「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」¹⁶⁾というアンケート項目に、姿勢とその教育についての項目を加えたものを実施した。質問総数は主質問が46問であるが、主質問の下にある枝質問を含めると97問であった。そのうち姿勢に関する質問は10問であった。

保護者には幼稚園を通して依頼をし、配布・回収も幼稚園で行ってもらった。調査にあたっては、個人情報公になることはないこと、下記の目的および、保育研究以外の目的に使用することは一切ないことを説明した上で、回答も任意であることを伝えて協力を依頼した。

【調査目的】 F幼稚園では、こどもたち一人一人の能力や個性を伸ばすことのできる保育を、日々目指しております。そのための様々な活動の中で、このたびは

K大学の協力のもと、姿勢・運動・生活についてのアンケートを実施することにいたしました。このアンケートを通して、さらなる保育の改善とお子様の健やかな成長をサポートしていきたいと考えています。

アンケート用紙はかなりの量になるので本稿には載せなかったが、結果において内容を把握されたい。

2. 調査対象

対象は、栃木県F幼稚園に通う幼少、年少、年中、年長組の園児の保護者147名（欠損項目のある回答も含む）から回答を得た。

3. 集計

本研究では、アンケート項目それぞれについて、度数、平均値および標準偏差の算出を行った。項目間の差の検討や相関などは求めなかった。

Ⅲ. 結果

今回の集計では、幼少、年少、年中、年長それぞれの学年ごとおよび全体の集計を表にまとめた。また、紙面の都合上、目的に見合ったデータのみを掲載することにした。

1. 姿勢についての考え

表1には姿勢についての考えの結果が示されている。まず、姿勢は重要かという質問では、「大変重要」と「重要」という回答のみであった。学年による差はまったくなく、全体平均では、大変重要は42%、重要が57%という結果であった。

次に、姿勢の重要性は、どのようなことと関係があるかという質問でも学年による差はみられなかった。結果は、「健康」が31%で最も多く、2番目に「外見」が24%となっている。次いで「運動能力」21%、「学力」16%となっていた。

表1 姿勢についての考え

質問項目	幼少	年少	年中	年長	全体	割合	
姿勢は重要か	大変重要	3	17	18	24	62	42%
	重要	6	23	23	32	84	57%
	どちらとも	0	0	0	0	0	0%
	あまり重要でない	0	0	0	0	0	0%
	まったく重要でない	0	0	0	0	0	0%
姿勢はどれと関係があるか (複数回答可)	学力	3	14	16	28	61	41%
	運動能力	6	23	18	36	83	56%
	健康	8	36	29	45	118	80%
	外見	3	31	23	34	91	62%
	性格	4	7	6	14	31	21%
姿勢は直した方がいいか、姿勢教育は必要か	絶対必要	2	9	10	11	32	22%
	必要	7	26	27	42	102	69%
	どちらとも	0	5	4	3	12	8%
	あまり必要でない	0	0	0	0	0	0%
	まったく必要でない	0	0	0	0	0	0%
いつ頃から行うべきか	幼稚園入園前から	3	10	12	15	40	27%
	幼稚園から	6	21	20	33	80	54%
	小学校低学年から	0	4	4	4	12	8%
	小学校高学年から	0	0	0	0	0	0%
	中学から	0	0	0	0	0	0%
	高校から	0	0	0	0	0	0%
	大学から	0	0	0	0	0	0%
姿勢教育は誰がやるべきか	家庭	0	5	4	5	14	10%
	学校	0	1	1	1	3	2%
	家庭と学校	9	27	30	47	113	77%
	家庭、学校、社会	0	3	4	2	9	6%

姿勢は直した方がいいか、すなわち姿勢教育は必要だと考えているかという質問には、69%の人が「必要」と答え、「絶対必要」の22%とあわせると9割以上の保護者がそう感じていることがわかった。

それでは、姿勢教育はいつ頃から行うべきだと考えるかという問には、小学校高学年以降という回答はまったくなく、「幼稚園入園前」27%、「幼稚園から」が最も多く54%で、「小学校低学年から」8%という結果であった。ほとんどの保護者が、姿勢教育は早めに始めるべきだとの考えを持っていた。

姿勢教育は誰がやるべきだと思うかという質問では、「家庭と学校の両方」という回答が最も多く77%に達していた。

2. 自分の子どもの姿勢について

表2には自分の子どもの姿勢についての結果が示されている。

まず、立位姿勢については各年代とも「普通」という回答が約6割あり最も多かった。「大変よい」と「よい」を合わせると37%で、「悪い」、「大変悪い」の

合計7%を大きく上回っており、自分の子どもの立位姿勢には概ね好評価を与えていた。

次に、座る姿勢についての結果では、「普通」の回答が51%で、よい方の回答が立位より少し減り、悪いが少し増えていた。特に、年少ではよいが15%しかなかった。

子どもの姿勢で気になるからだの部位では、「背骨(猫背)」が最も多く、全体で48%あり、次いで「足」の28%となっていた。

最後に、子どもの姿勢にどの程度関心があるかという質問には、7割以上の保護者が「常にチェック」、「気づけば注意」と回答していた。

3. 遊びや運動の最近の状況について

表3には遊びや運動の最近の状況についての結果が示されている。

子どもが主に遊ぶ場所はどこかという質問で最も多かった回答は「家の庭で」が44%だった。次いで「公園」の22%となっていた。

次に、遊びは室内と戸外とどちらが多いかという質

表2 子どもの姿勢

質問項目		幼少	年少	年中	年長	全体	割合
子どもの姿勢 立位	大変よい	1	3	6	5	15	10%
	よい	4	11	8	16	39	27%
	普通	3	23	25	30	81	55%
	悪い	1	3	2	3	9	6%
	大変悪い	0	0	0	2	2	1%
子どもの姿勢 座位	大変よい	1	0	2	2	5	3%
	よい	2	6	9	18	35	24%
	普通	5	26	20	24	75	51%
	悪い	1	8	9	11	29	20%
	大変悪い	0	0	1	1	2	1%
子どもの姿勢 食事中	大変よい	1	0	1	2	4	3%
	よい	3	6	3	9	21	14%
	普通	2	20	14	27	63	43%
	悪い	3	13	18	15	49	33%
	大変悪い	0	0	3	3	6	4%
子どもの姿勢で気になる 部位	背骨(猫背)	3	21	21	25	70	48%
	頭	0	4	4	6	14	10%
	首	0	5	6	6	17	12%
	腰(骨盤より上)	0	2	7	3	12	8%
	骨盤	0	1	2	5	8	5%
	膝	0	1	2	3	6	4%
	足	4	9	14	14	41	28%
子どもの姿勢への関心	腕の位置	0	2	4	3	9	6%
	常にチェック	0	1	1	5	7	5%
	気づけば注意	8	28	27	34	97	66%
	目に余る時には	1	10	10	17	38	26%
	ほとんど注意しない	0	1	0	0	1	1%
まったく注意しない	0	0	0	0	0	0%	

表3 遊びや運動の最近の状況について

質問項目	幼少	年少	年中	年長	全体	割合	
子どもが主に遊ぶ場所	公園	0	12	12	8	32	22%
	家の近くの路地や空地	1	5	3	10	19	13%
	家の庭	4	15	18	28	65	44%
	近くの野原	0	0	1	0	1	1%
	園庭や校庭	3	8	7	8	26	18%
	その他	1	0	0	1	2	1%
遊びは室内か戸外か	非常に室内	1	3	6	9	19	13%
	室内	2	6	13	12	33	22%
	同じくらい	4	18	9	19	50	34%
	戸外	2	6	8	10	26	18%
	非常に戸外	0	7	5	5	17	12%
体を活発に動かす遊びの状況	まったくしない	0	0	0	0	0	0%
	少し	1	5	6	8	20	14%
	よくする	6	20	28	30	84	57%
	非常によくする	2	15	7	17	41	28%
遊びは園でやっている遊びをするか	まったくしない	0	0	0	1	1	1%
	少し	0	10	9	11	30	20%
	よくする	3	19	22	32	76	52%
	非常によくする	0	5	5	6	16	11%
	わからない	6	6	5	5	22	15%
外遊びをする時間	まったくしない	0	2	1	1	4	3%
	30分以内	1	1	1	7	10	7%
	30分～1時間	2	13	17	22	54	37%
	1～2時間	4	11	9	14	38	26%
	2～3時間	1	9	8	6	24	16%
	3時間以上	1	2	5	3	11	7%
一緒に遊ぶ友だちの数	一人で	3	9	6	11	29	20%
	2～3人	6	26	31	30	93	63%
	4～5人	0	2	2	10	14	10%
	6人以上	0	1	1	1	3	2%
家族の方が一緒に遊ぶか	まったくしない	0	2	2	3	7	5%
	月1～2	1	13	11	19	44	30%
	週1	3	12	12	17	44	30%
	週2～3	1	6	11	10	28	19%
	週3～4	2	4	1	0	7	5%
	毎日	2	3	3	5	13	9%

間に対して「同じくらい」が34%だったが、総合的には若干室内の方が多い傾向にあった。

4. 最近の子どもの様子

表4には最近の子どもの様子の8つの質問から本稿で議論する2つを抜粋して示した。

幼稚園には楽しそうに行くかという質問に対しては、80%以上の園児が「毎日」と答えている。しかし、今日1日あったことを家族によく話すかという質問では比率が下がっている（58%）。

5. 保護者への質問（1）体を動かす遊びや運動・スポーツに対する考え方について

表5には保護者の体を動かす遊びや運動・スポーツに対する考え方についての結果が示されている。

遊びや運動より塾の方がよいと考えている保護者は1割程度しかいなかった。したがって、遊びや運動が重要だと考えている保護者は92%（どちらかと言えばを含め）にのぼっている。体力は人生の役に立つ、子どもの頃の遊びや運動は人生に役立つ、遊びや運動で協調性がつくという回答もかなり肯定的であった。その上で、遊びや運動の機会を幼稚園はもっと作るべきだは約半数がそう考えており、遊びや運動ができる環境作りに社会はもっと取り組むべきだは、幼稚園でをかなり上回り82%がそうだと答えていた。

6. 保護者への質問（2）子どもの遊びや運動に対する保護者の態度・行動について

表6には子どもの遊びや運動に対する保護者の態度・行動についての結果が示されている。

子どもが遊びや運動をする様子を見た時にはほめてあげるかどうかに対する質問では、「毎日」66%、「時々」27%と高値を示した。

次に子どもが遊びや運動について話したら一生懸命に聞かかという質問では、95%が「毎日」、「時々」と答えている。

機会があれば遊びや運動をするように子どもに勧められているかでは77%が「毎日」、「時々」と答えている。

一方で、家族と一緒に遊びや運動をする機会をなるべくつくるは55%にやや値が下がっている。

なお、子どもの生育や生活の状況についての質問（20問）、家庭環境についての質問（4問）、生活行動

表4 最近の子どもの様子

1. 生活行動について

質問項目		幼少	年少	年中	年長	全体	割合
朝、園に楽しそうに出かけていく	毎日	6	35	32	49	122	83%
	時々(週1~2)	1	4	6	4	15	10%
	たまに(月1~3)	2	0	2	1	5	3%
	全くない	0	1	0	1	2	1%
今日1日あったことを家族によく話す	毎日	5	21	26	33	85	58%
	時々(週1~2)	2	16	11	18	47	32%
	たまに(月1~3)	1	1	4	4	10	7%
	全くない	1	2	0	1	4	3%

表5 保護者への質問（1）

体を動かす遊びや運動・スポーツに対するあなたの考え方について

質問項目		幼少	年少	年中	年長	全体	割合
遊びや運動より塾の方がよい	そう思う	0	1	1	0	2	1%
	どちらかと言えば思う	2	5	6	2	15	10%
	どちらかと言えば思わない	2	11	12	23	48	33%
	そうは思わない	5	23	21	30	79	54%
遊びや運動は重要	そう思う	6	18	14	18	56	38%
	どちらかと言えば思う	2	20	24	33	79	54%
	どちらかと言えば思わない	1	2	2	3	8	5%
	そうは思わない	0	0	0	2	2	1%
体力は人生の役に立つ	そう思う	6	21	20	24	71	48%
	どちらかと言えば思う	3	16	18	29	66	45%
	どちらかと言えば思わない	0	3	1	2	6	4%
	そうは思わない	0	0	1	1	2	1%
子どもの頃の遊びや運動は人生に役立つ	そう思う	7	19	21	27	74	50%
	どちらかと言えば思う	1	18	18	26	63	43%
	どちらかと言えば思わない	1	1	1	1	4	3%
	そうは思わない	0	1	0	2	3	2%
遊びや運動は友人を作る	そう思う	7	25	22	34	88	60%
	どちらかと言えば思う	2	15	16	20	53	36%
	どちらかと言えば思わない	0	0	2	2	4	3%
	そうは思わない	0	0	0	0	0	0%
遊びや運動で協調性がつく	そう思う	8	31	34	40	113	77%
	どちらかと言えば思う	1	8	5	14	28	19%
	どちらかと言えば思わない	0	0	1	1	2	1%
	そうは思わない	0	0	0	0	0	0%
遊びや運動の機会を幼稚園はもっと作るべきだ	そう思う	1	2	4	7	14	10%
	どちらかと言えば思う	4	18	20	23	65	44%
	どちらかと言えば思わない	3	10	8	12	33	22%
	そうは思わない	1	9	5	9	24	16%
遊びや運動ができる環境作りに社会はもっと取り組むべきだ	そう思う	3	10	16	14	43	29%
	どちらかと言えば思う	5	22	20	31	78	53%
	どちらかと言えば思わない	0	5	3	8	16	11%
	そうは思わない	1	1	0	1	3	2%

表6 保護者への質問（2）

子どもの遊びや運動に対する保護者の態度・行動について

質問項目		幼少	年少	年中	年長	全体	割合
子どもが遊びや運動をする様子を見た時にはほめてあげる	毎日	7	29	28	33	97	66%
	時々(週1~2)	1	10	10	18	39	27%
	たまに(月1~3)	1	1	2	5	9	6%
	全くない	0	0	0	0	0	0%
子どもが遊びや運動について話したら一生懸命に聞く	毎日	5	33	35	42	115	78%
	時々(週1~2)	2	6	5	12	25	17%
	たまに(月1~3)	1	0	0	2	3	2%
	全くない	0	0	0	0	0	0%
機会があれば遊びや運動をするように子どもに勧めている	毎日	4	15	11	19	49	33%
	時々(週1~2)	3	16	24	22	65	44%
	たまに(月1~3)	2	8	4	13	27	18%
	全くない	0	1	1	1	3	2%
家族と一緒に遊びや運動をする機会をなるべくつくる	毎日	3	12	7	8	30	20%
	時々(週1~2)	3	12	19	18	52	35%
	たまに(月1~3)	2	14	14	26	56	38%
	全くない	1	2	0	1	4	3%
スポーツクラブなど、仲間と継続的にスポーツをする場を進めている	毎日	0	8	5	10	23	16%
	時々(週1~2)	1	11	15	24	51	35%
	たまに(月1~3)	1	5	9	8	23	16%
	全くない	6	15	11	9	41	28%

についての質問（8問中6問）、子どもの自立についての質問（6問）、性格と心身の状態についての質問（9問）、しつけについての質問（6問）、いっしょに運動や遊べる場所についての質問（7問）、保護者の運動実践状況と運動履歴についての質問（7問）についての結果は、紙面の都合上割愛する。

IV. 考察

1. 姿勢についての考え（表1）

姿勢が大事かと問われれば、すべての人は大事であると答えた。ただ、姿勢の重要性は、どのようなことと関係があるかという質問（複数回答可）の回答は割れていた。最も多い「健康」への回答でも31%しかなかった。複数回答可ということで、示した項目のほとんどに関係していると考えたようにも受け取れる。したがって外見という項目にも多くの回答が寄せられたと考えられる。見た目から入り、本質的なこと、例えば健康、活動力へと考えを進めていくのも一つの手段かもしれない。

姿勢教育の必要性は9割の人が望んでいる。幼稚園など教育機関において、保護者に対して姿勢教育の重要性をしっかりと説明すれば、その導入はすんなり行くと思われる。姿勢教育は誰がやるべきかという質問で、家庭だけでも、学校や幼稚園だけでもだめだという認識がそのことをあと押しできるといえるだろう。

ただ、地域（社会）も連携してというところまでは考えていないようだ。おそらく具体的な発想がわからないからだと思われる。

姿勢教育はいつ頃から行うべきかの問いでは、小学校高学年以降という回答はまったくなく、「幼稚園入園前」27%、「幼稚園から」が最も多く54%で、「小学校低学年から」8%という結果であった。ほとんどの保護者が、姿勢教育は早めに始めるべきだとの考えを持っていた。その意味でも幼稚園における姿勢教育の導入は必要かつ受け入れやすいと考えられる。

2. 自分の子どもの姿勢について（表2）

保護者は、自分の子どもの姿勢はそれほど悪いとかんじていないようである。しかし、阿部ら¹⁾や塩田ら¹⁸⁾が現代人の姿勢の悪さを指摘し、多くの人が姿勢をよくしたいと思っている⁸⁾ことを考えれば、姿勢教育の問題は奥深いと思われる。なぜなら、子どもの頃の姿勢はよいのに大人になるにつれて姿勢が乱れていくのだとすれば、幼少期の姿勢教育の必要性が指摘できる。あるいは、保護者のよい姿勢への認識が甘いのだとすれば、保護者に対する姿勢教育の必要性も指摘できることになる。ただ、立位より座位（悪いの回答：立位7%、座位21%）で子どもの姿勢の悪さを感じていることは、姿勢チェックのポイントも大事だといえる。さらに食事中はさらに悪く（37%）なっているため、どのような場面でどこを見るかといった姿

勢チェックの方法と機会を、家庭でも幼稚園や学校でも確立して、姿勢を常にチェックする体制を整えることが重要だと考える。

子どもの姿勢で気になるからだの部分では、「背骨(猫背)」が最も多く、全体で48%であったが、これは姿勢といえば背中(背骨)という認識から来るとと思われる。また、足が2番目の28%というのは、足=脚との認識かもしれないので、今後のアンケートの作成を考える必要があるであろう。

最後に、子どもの姿勢にどの程度関心があるかという質問には、7割以上の保護者が「常に」、「気がつければ注意」と回答していたことから、先に述べたようにこの時期からの姿勢教育の導入の必要性と可能性を支持するものと考えられる。

3. 遊びや運動の最近の状況について(表3)

調査地が田舎で、家に広い庭がある家庭が多いことからの結果(1位:家の庭44%)かもしれない。また、戸外より室内での遊びの方が若干多い傾向にあったが、文科省の報告にもあるように、戸外遊びの機会を増やす必要があると思われる。

4. 最近の子どもの様子(表4)

表4は、どのような属性の子どもの持っているかを示す目的で調査した。

また、林成之⁷⁾の脳科学からの教育では、感動がキーワードになる。今日1日あったことを家族によく話す割合があまり多くない(58%)ことから、感動を呼び起こすプログラムが必要である。調査したF幼稚園では、この調査の後に感動を呼び起こすプログラムを入れようと考えていた。そのことからすると、家に帰ってから今日の出来事を生き生きと話す園児が増えることが期待される。

5. 保護者への質問(1)体を動かす遊びや運動・スポーツに対する考え方について(表5)

これは、保護者の属性を調べる目的で実施した調査項目である。調査に協力してくれた保護者は、総じて運動やスポーツに対する理解が高かった。その上で、幼稚園での取り組みに期待しつつ(54%がもっと機会を作って欲しいと回答)、社会への要望(82%同上)が高かった。このことも、幼稚園時期における身体活動教育ならびに姿勢教育の導入の必要性を示唆するものと考えられる。

6. 保護者への質問(2)子どもの遊びや運動に対する保護者の態度・行動について(表6)

自分の子どもの遊びや運動に対する関心は極めて高い結果が得られた。しかし、自らが子どもといっしょに活動することにはやや消極的であった。これには様々な原因があるが、そうした機会を増やす取り組みも必要であると思われる。

V. 結論

本研究では、幼稚園児の保護者に対して姿勢についての考えを聞くことで、姿勢教育の導入に向けた取り組みをする上での情報を得ることを目的とした。したがって、アンケート項目それぞれについて、度数、平均値および標準偏差の算出を行った。項目間の差の検討や相関などは求めなかった。

それでも、次に向けた有益な情報がいくつか取得できたと考える。

【姿勢についてのアンケートのまとめ】

1. 幼稚園の保護者は姿勢への関心が高い
2. 姿勢教育の開始時期は幼稚園からが適切と考えている
3. 姿勢教育は家庭と幼稚園の両方で行うのがよい
4. 子どもの姿勢の気になる部分は背骨(猫背)だが、足への関心も高い
5. 食事時の姿勢の悪さが気になる
6. 子どもの姿勢のチェック体制の強化が望まれる

以上のことから、幼稚園において姿勢教育を導入する必要性と可能性が示唆された。それは教育をする側、幼稚園のスタッフと保護者への意識高揚プログラムの導入からはじめ、姿勢チェックの方法の確立とルーチン化を行う。これらは既存の知識を用いればそれほど難しくはなく、やるかやらないかの問題だといえる。

次に、重要なのは園児の姿勢に対する意識を持たせ、自らで姿勢を考え、作り上げていくプログラムの導入である。これは手間のかかることと思われるが、指導側の意識が高まれば徐々にでも進められると思われる。

研究の発展性については、本研究におけるデータの分析を進めたい。項目間の関係や群間の比較などの統計手段を取り入れた解析を行って行きたい。

Ⅵ. 引用文献

- 1) 阿部茂明, 野井真吾, 中島綾子, 下里彩香, 鹿野晶子, 七戸藍, 正木健雄 (2011), 子どもの“からだのおかしさ”に関する保育・教育現場の実感—「子どものからだの調査 2010」の結果を基に—, 日本体育大学紀要, 41, 65-85.
- 2) 別所龍二 (2007), 子どもの体力低下と「姿勢教育」, 四天王寺国際仏教大学紀要, 第44号, 125-138.
- 3) 藤田武志 (2008), 親と子どもの意識と行動, 上越教育大学研究紀要, 第27号, 67-72.
- 4) 藤原勝夫 (1994), 構え姿勢と反応動作の速さ, J.J. Sports Sci, 13, 739-749.
- 5) 古屋宏基, 丸山剛生 (2008), 単純反応動作における構え姿勢の違いが筋活動パターンに及ぼす影響, ジョイント・シンポジウム講演論文集, スポーツ工学シンポジウム2008.
- 6) 橋本昌栄, 藤原禎子, 米谷正造, 木村一彦 (2006), 岡山県の小学校養護教諭の姿勢への関心と姿勢教育実施現状について, 川崎医療福祉学会誌, 15, 601-605.
- 7) 林成之 (2011), 子どもの才能は3歳, 7歳, 10歳で決まる! 脳を鍛える10の方法, 幻冬舎新書, 東京.
- 8) 原田妙子, 若い女性の姿勢に対する意識について, 名古屋女子大学紀要, 57, 67-74.
- 9) 平野朋枝 (2019), 幼児期における親の運動に対する意識と学童期の運動能力との関係, 名古屋短期大学研究紀要, 第57号, 75-80.
- 10) 石川雄一, 山下哲央, 山神眞一, 藤元恭子 (2013), 競泳スタートにおける構え時の重心位置がスタートパフォーマンスに与える影響, 香川大学教育学部研究報告, 第1部 (139), 91-101.
- 11) 岸川晃大, 河辺章子 (2014), 膝関節角度と踏み出し距離からみた構え姿勢による反応時間への影響, 身体行動研究, 3, 15-21.
- 12) 厚東芳樹, 栗田七奈美 (2020), 幼児の体力・運動能力に関する現状と課題, 人間生活文化研究, No.30, 825-835.
- 13) 国立女性教育会館 (2005) 平成16年度・17年度家庭教育に関する国際比較調査報告書.
- 14) 宮口和義, 出村慎一 (2014), 幼児の立位重心動揺および立位姿勢に及ぼす草履着用の影響, 体育測定評価研究, 14, 43-52.
- 15) 森尻強, 塩田徹, 栗原祐二, 佐藤幹夫, 浦田あき子 (2006), 女子大学生の日常生活姿勢と理想姿勢の意識について, 東京家政大学研究紀要, 第46集 (1).
- 16) 文部科学省 (2011), 体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書.
- 17) 永田誠, 大村綾, 菅原航平 (2017), 幼児の日常生活と親のかかわりに関する考察—2006年調査結果との比較を通して—, 日本生活体験学習学会誌, 第17号, 1-13.
- 18) 塩田徹, 森尻強, 佐藤幹夫 (2007), 女子大学生における姿勢矯正の意識と姿勢変化の関連について, 作新学院大学紀要, 17, 91-103.
- 19) 塩野谷祐子 (2016), 幼児の身体活動に関する親の態度に影響する要因についての検討, 和洋女子大学紀要, 第56集, 75-84.
- 20) 高橋宏文, 川合武司, 浜野光之, 勝又宏 (1997), バレーボールにおけるサーブプレシープと動作時間及び構えとの関係, 順天堂大学スポーツ健康科学研究 1, 106-112.
- 21) 中央教育審議会答申 (2002), 子どもの体力向上のための総合的な方策について
- 22) Woollacort, M. and Shumway-Cook, A. (1993), 姿勢と歩行の発達—生涯にわたる変化の過程—, 大修館書店, 東京.

Ⅶ. 謝辞

本研究を行うにあたり、アンケートの配布と回収、保護者への説明のご協力いただいた栃木県ふじおか幼稚園のスタッフの皆様へ感謝いたします。また、アンケート調査にご協力いただいた保護者の皆様へ感謝いたします。